



福島原発事故 を哲学する



小森 三郎

目 次

まえがき

第1章 現在文明の成立ち

西欧中世の思想からの転換 / 産業革命以降の文明的特徴 / デッサウエルの技術哲学

発明品としての原発

第2章 安全に対する両者の相違

原発推進の情宣 / 安全神話に先立つ立法 / 安全神話の中身 / 議論が噛み合わない理由

第3章 新手の公害

公益と公害 / 原発公害の特徴とマスコミ報道 / 原発の安全を哲学する

第4章 機械文明の哲学的考察

安全神話のその後 / 原発事故を苦悩する / 人間至上主義 / 原子力村の特権的思考

第5章 止まらない経済競争

経済至上主義 / 原子論による経済競争の説明 / 経済競争が自然を工業製品の材料化

第6章 近代の思考枠の変革

人類を脅かす問題 / 近代哲学の変革 / 科学技法の変革 / 低エネルギーの生活様式へ

あとがき

参考文献

2011年3月11日、東北関東大地震を契機に福島第1原子力発電所の原子炉が、1号機、3号機、2号機、4号機と相次いで爆発し、推定90京ベクレル以上の放射性物質を飛散させ、かつ、原子炉冷却水が推定10京ベクレル汚染水に変わり海へも漏出しました。政府は原発の事故を今も収束できず、2013年1月現在、毎時1000万ベクレルの放射性物質を陸海空に撒き散らしています。原発事故の規模は国際評価尺度レベル7になり、手が付けられない状況を加味すると、事故後の甚大な影響は、今後何年も続き無情にも多くの被災者を苦しめます。さらに多くの国民は、大量に飛散した放射性物質の環境および農水産物から逃れることができず、外部被曝と内部被曝の影響を末代まで受けます。

このような原発事故を受けて、原発関連の本が本屋の特設コーナーに平積みされています。今まで、原発に対する警鐘をわが身を省みずに鳴らしていた方の本は、平積みされるのは当然です。筆者は、哲学者や宗教家からいかなる内容の原発事故に関する本が出版されるか注目していました。アマゾンの出版検索を操作すると、「思想としての3.11」「文明の災禍」「原発とキリスト教」など多くを目にしました。以降も、これに類の本が出版されるでしょうし、新聞にも時々哲学者の方が執筆されています。哲学や宗教は生きることに係わることを常に思索していますから、原発事故との関係から生きるということを出版で示すかと考えたのです。無謀にも素人の筆者が、一介の哲学者になっただけで挑戦したのが拙著です。

哲学的探求または宗教的探求というものは、われわれ自身ののっぴきならぬ自己の問題をその当時、その民族の、その環境、その歴史的立場における条件下で行われます。この度の、福島第1原発事故は、のっぴきならぬ自己の問題として敢然と立ち向かいました。素人の筆者が、無謀にも福島第1原発事故をきっかけに哲学的に思惟します。哲学的に考えると、主体の態度が大きく影響します。改めていうまでもなく、主体の態度といっても、直接にこの自分というものがあって、自分の利益、自分の欲望のために何かをする、そういう意味の主観的欲望の主体に関するものではありません。主観的欲望を突き抜けた先の、究極的主体となり思惟します。

この度の福島第1原子力発電所の事故は、機械文明における発電という光明面と放射性物質の未来永劫に亘る悪影響の暗黒面を如実に曝け出しました。原子力村は再び原発安全との宣伝をしていますが、事の本質は安全の押し売りという単純な話ではありません。もっと深く原発事故を掘り下げないと禍根を残しそうです。原発被害者の救済とか、原発の代替エネルギーを火力にするとか、その先のエネルギーをどうするとの議論は大切ですが、根源的には近代の哲学観と科学観がこの先の人類の安全を担保できるのかということです。我々は得てして発明品の光明面のみを考えてしまい、暗黒面から顔を背ける傾向にあります。そのため、事が大きくなってから考える傾向にあります。それと言うのも、近代の哲学観と科学観に基づく人間至上主義というべき驕りと、自然を工業製品の原材料としかみない機械論的自然観から来ています。

近代の哲学はデカルトから始まり、近代の科学はベーコンとガリレオから始まりました。産業革命以降は、科学技術による発明品が人々の生活様式を大きく変え、微視的物理化学の知見を応

用した第二次産業革命（主に石油の利用）以降は、自然の制約からの解放が一段と進展しました。そして、現在のような地球全体が機械文明全盛時代を迎えました。この機械文明全盛時における福島第1原発事故を哲学の立場から文明論的に思惟します。

なお、単に筆者の哲学的論考と称す感想文になっておりますこと、お許しをいただきたい。

西欧中世の思想からの転換

我々は、大変便利で安楽な時代に生きています。つまり、大変便利で安楽な生活を実現している人工物に囲まれています。このような生活には、多量のエネルギーを必要とし、人間の動力ではなく人工的発動力（蒸気、電気、爆発ガス等）が支えています。福島第1原発事故により、電気エネルギーは欲しいが放射性物質は御免こうむりたい、ハムレットの心境になっています。

このような時代に我々は生きていますが、特徴は自然科学の法則を組み合わせた発明品を創出する経済活動を活発化させていることです。時代は思想を持っていますが、現在の思想の源は遡ること1600年頃の西洋に端を発しています。1600年頃の西欧はキリスト教が生活の隅々を規定しており、神学校ではスコラ哲学が盛んでした。スコラ哲学は、論理的にキリスト教の超越した神とアリストテレスの自然に内在的な神を結びつけています。アリストテレスは古代のギリシャ人ですから、自然を観想するのです。観想とはどこまでもものの形を見る、そしてその形をただ見るだけではなしに理性によって統一し組織するのです。従って、古代ギリシャ人の観想の結果が、学校の教科書で習うユークリッド幾何学が示す、美しい、秩序整然たる体系なのです。古代ギリシャでは物を作ることに関する学問は、工作が奴隷に属する以上、市民が携わるところではありません。ゆえに、スコラ哲学でも美しい、秩序整然たる体系を継続しており、一般原理から演繹的に結論を導きます。その代表が、天動説かもしれません。

スコラ哲学の時代にあって、1600年頃、フランシス・ベーコンとガリレオ・ガリレイが相次いで、現実の観察や実験を重んじる「帰納法」の主張と実験結果を数学的に分析する画期的方法を考案しました。このような考えは、当時の手工業に使われる器械に関する工作に適用されたと思われる。我々は、学校の物理の一番最初に学習する槌子の原理とか、斜面で物をすべらす場合の斜面の法則とか、或は滑車の理法などが当時の手工業へ適用されたと推測します。このような行為は、中世までの自然に対する観想とは異なる態度であり、自分が肉体を働かせて工作するものにして初めて理解できます。自然に対する受身から一部ではあるが能動に変化しています。能動になるとは、工作物を製作し製作者の意図を実現する行為です。そういう意味の作る人になることが近世の特色です。

一方科学の方法論ではなく、デカルトは1637年の「方法序説」で「我思う、ゆえに我あり」の言葉が象徴するように、当時の保守的思想であったスコラ哲学の教えであるところの「信仰」による心理の獲得ではなく、信仰のうちに限定してではあれ、人間の持つ理性を用いて真理を探究する哲学を打ち立てました。デカルト哲学の後押しもあって、工作物を製作し製作者の意図を実現する行為は、徐々に広まり産業革命（ワットの蒸気機関の発明は1756年）を迎えるのです。

産業革命以降の文明的特徴

産業革命以前は動力が人間または水車、馬や牛などの生の力そのままです。従って、道具の制作という意味合いが強いですが、産業革命以降は動力が人工的発動力（蒸気、電気、爆発ガス等）になり、道具の制作から機械の製作へと質的に変化・発展しました。道具の場合は、その動力となるものが人間自身にほかならぬという事情と結びついて、人間が道具を支配し、人間が道具には支配されないという人間主体性を保持することが容易です。機械の場合には、人間がこれを使っているつもりでも、実は機械の運転の管理者であり番人となり、人間の自主的主体性を確保し続けることは、機械の場合には甚だ困難です。人間と機械の間には道具の場合と違って断絶があり遮断があり、自動性が機械の本質をなしています。

このような機械偏重の考えは、産業革命以降とともに成立し機械文明と称することができます。この産業革命は、資本主義の経済機構と連携して進みました。産業革命以降、いくたの人工物が大変便利で安楽な生活を実現することが認知され、個人あるいは集団組織が加速度的に、自然科学の法則を組み合わせた発明品を競争して創出しています。発明品をエネルギーに限定しても、動力源が蒸気力より電気力に進み、あるいは石油の爆発力に進み、ますます自然の制約を脱しきったところに、機械文明の発展が見られます。そして、今日では動力源を原子力に見出す文明の段階になりました。

機械は人間が自然科学の法則を組み合わせ発明し、人間が組み立てた無生物です。自然科学の法則は理性により発見しますが、法則は善悪と無関係の事実の理法です。その法則を人間が、同じ理性で組み合わせ商品が発明しますが、発明品は手放しで喜べず明暗が表裏一体になっています。この度の福島第1原発事故は、発明品である原子力発電所の発電という光明面と放射性物質飛散という暗黒面を如実に曝け出しました。機械の場合には道具の場合と比較にならぬほど、機械の自動性により人間意志のプレーキがいつも簡単に破壊され、機械が自分自身で放射性物質生成の道を驀進します。ここに至るのも、光明面のみを賛美する功利的価値観が、貨幣を媒介にした経済競争に目的化してしまったからです。

デッサウエルの技術哲学

自然科学の法則を組み合わせ、発明する行為は技術の範疇です。そしてこの機械技術の進展は、その速度において道具的技術と比較にならず、驚異的速度でいくたの商品を生み出しています。そして機械技術の問題性は、公害で実感できるようになりました。しかし機械技術の本流である技術に関する思惟は少なく、深く掘り下げた思想はあまり見当たりません。この中であってひとり群を抜く卓見が、スイスの技術家デッサウエル氏の思想です。

氏は、技術というものの領域をカントの三批判（純粋理性批判、実践理性批判、判断力批判）が取り上げた三つの領域以外の第四の領域を構成するものと考えます。カントの第一批判は自然科学の対象である我々は何を知りうるか、第二批判は道徳である我々は何をなしうるか、第三批判は芸術である我々は何を欲しうるかを問題にしています。技術の世界は、自然科学者が探求した法則を再編成し、自然界にない新たな存在を作り出します。つまり、技術の世界では人間の目的に沿う発明を行います。

技術の本質は、確かに技術を深く掘り下げた氏の哲学どおりですが、自然法則を発見する理性が、自然法則を再編する過程で誤らないのかということです。公害が多発していることを思い浮かべれば、技術を司る理性に全幅の信頼はできません。そもそもカントは、人間のもつ純粹理性、実践理性、判断力とくに反省的判断力の性質とその限界を考察しています。それでも自然法則の発見の場合は、隠れた事実の認識であり価値観が侵入せず理性は誤りにくいですが、発明の場合は効率性、経済性、利便性等の功利的価値観が技術者に妥協をよぎなくさせ、理性は誤ってしまいます。さらに組織が目標とする発明品は、組織の思惑・利潤が強烈に作用し技術者の思いとは異なる方向に動き出しても、組織にはブレーキが作用しないため原発の安全神話が崩壊するまで機械の自動性のごとく進行します。製造会社から離れた原発は、単なる運転の管理者と番人の管轄となるため、デッサウエル氏が唱える第四の領域からも逸脱します。原子力発電所は東京電力が運転の番人であり、原子力安全・保安院が管理者です。いずれもデッサウエル氏が唱える第四の領域から離れ、原子力発電所は第五の領域とも言うべき管理者・番人の世界に属します。そのため、運用マニュアルに基づく原子力発電所の管理者および番人は、放射性物質飛散事故に対処の術

を有しておらず傍観するのみです。

発明品としての原発

福島第1原発の事故で注目を浴びた原子力発電所は、デッサウエル氏の説く第四の領域に属する発明品です。発明品は自然科学者が探求した法則を再編成し、自然界にない新たな存在です。原子力発電には、多くの自然科学者が探求した法則が適用されていますが、代表としてエリニコ・フェルミとアルベルト・アインシュタインの両氏を選びます。イタリア生まれの物理学者フェルミは、中性子を利用した人工放射性元素とウランの核分裂に関する熱中性子（注1）の発見によって、1938年にノーベル物理学賞を受賞しました。一方、アインシュタインは世界一有名なエネルギーが物質と等価の公式、 $E = mc^2$ により、極少量の質量欠損が莫大なエネルギーになる保証をしました。科学者と技術者は、彼らの深遠な発見を再編成すると原子力発電の原理が導かれ、原子力潜水艦で得られた原子炉技術を商用化して原子力発電所が誕生しました。この原子力発電の発明の過程に、政治家と官僚と経済人の思惑・欲望が強烈に作用し、自然法則を発見した科学者の理性からは思いもつかぬ発明品になりました。もちろん、技術者は原発の循環冷却を前提とした5重の壁（注2）で放射性物質を閉じ込める算段をしますが、効率性、経済性、利便性等の功利的価値観が技術者に妥協を余儀なくさせ、前提条件付安全しか確保できなくなります。そのため、安全基準から漏れた事象で前提条件が未成立となり原発事故が発生したのです。

（注1） 熱中性子とは

ウランの核分裂で中性子は発生するが、この中性子を水などを使い減速させた中性子を「熱中性子」と言います。熱中性子にするとウランの核分裂が促進できます。ですから、原子力発電所の原子炉に水を使います。

(注2) 放射性物質を閉じ込める5重の壁

第1の壁（パレット）・・・燃料を陶器のように焼き固めたもの

第2の壁（被覆管）・・・ジルコニウム合金製

第3の壁（原子炉容器）・・・燃料を収める鋼鉄製容器

第4の壁（原子炉格納容器）・・・機密性の高い鋼鉄製容器

第5の壁（外部遮蔽コンクリート）・・・厚い鉄筋コンクリート製の壁

第2章 安全に対する両者の相違

原発推進の情宣

原発を推進している方の考えは、東京電力のホームページで窺がえます。以下に、「なぜ日本は原子力発電を推進しているのですか」との問いに対する返答を記します。当然、東京電力の広報ですから、光明面のみ記載しており筆者が（青字）を挿入しました。

日本は、世界で消費されるエネルギーの約5%を消費する消費大国でありながら、エネルギー資源の80%以上を海外からの輸入に頼っている資源小国です。今後も増え続けるエネルギー需要や、地球温暖化防止のため、CO2排出量の要請に応えていくために、原子力発電はなくてはならないものとなっています。現在、日本では世界第3位となる53基（平成16年度末）の商業用原子炉が稼働しており、日本の発電電力量の約3分の1を供給しています。また、これらの原子力発電所の円滑な運転を支える原子燃料サイクル事業の基盤整備も着実に進められています。（そして、弊社は早く原子燃料サイクル事業が実現することを望んでいます。）

日本の電力は、水力、火力、新エネルギー、原子力と多様化した発電方式により供給されています。安定的な電力供給のためには、石油をめぐる国際的なエネルギー情勢や（原子力発電所の無事故や）地球環境での環境問題の対応等も考慮し、各発電メリットを組み合わせ、最良のバランスで発電することが必要です。原子力発電所は、燃料が再利用でき、CO2を発電の際に排出しないこと、少しの燃料で大量の発電ができ、約1年間の間連続運転が可能なことといったメリットを有効に生かし、（起動・停止が困難な原発の運転特性から）ベース電源として利用されています。

（陸海空への放射性物質の大量飛散は除き、）環境保全に対しての危機感が高まるなか、温暖化の抑制が最重要課題となっています。各国で発電構成比の高い石油や石炭などの化石燃料は、発電時に（CO2排出量の少ないコンバインドサイクル発電に移行）温暖化をもたらすCO2を排出しますが、原子燃料は発電過程でCO2を排出しないため、（代わりに核分裂時のエネルギーの3分の2を海に流し温め）温暖化防止に重要な役割を果たします。

また、今後、発展途上国を中心とした人口増加と経済発展にともなって、化石燃料の消費量増加が見込まれ、資源の枯渇も深刻な問題となっています。燃料をリサイクルでき（たあかつきには）、ウラン資源を効率的に利用できる（軽水炉と高速増殖炉）原子力発電は、（放射性物質の消滅技術があれば）地球環境の保全にも大きな役割を担っていると言えるでしょう。

安全神話に先立つ立法

原子力発電は、1966年に日本原子力発電（株）東海発電所が、我が国最初の商業用として営業運転を開始しました。営業運転に先立つ5年前の1961年に原子力損害賠償法が、立法化されました。その内容は、「原子炉の運転等の際、当該原子炉の運転等により原子力に損害を与えたときは、当該原子炉の運転等に係る原子力事業者がその損害の賠償する責めに任ずる。ただし、その損害が異常な巨大な天変地異又は社会的動乱によって生じたものであるときは、この

限りではない」となっています。つまり、巨大な天変地異又は社会的動乱による損害は、電力会社が賄えないため、法律を制定し税金で肩代わりさせる考えです。火力発電には火力発電損害賠償法がありませんから、原子力発電は非常に危険であるとの認識により賠償金が巨額になるから立法化したものと思われます。

さらに、原子力発電所の立地審査指針は、同じく1966年の日本原子力発電（株）東海発電所の営業運転開始に先立つ1964年に原子力委員会が次の通り決めました。

立地条件の適否を判断する際には、少なくとも次の3条件が満たされていることを確認しなければなりません。

(1) 原子炉の周囲には、原子炉からある距離の範囲には非居住区域であること。

(2) 原子炉からある距離の範囲内であって、非居住区域の外側の地帯には低人口地帯であること。

(3) 原子炉敷地は、人口密集地帯からある距離だけ離れていること。

火力発電所は都会の近くに設けていますが、原子力発電所の立地審査指針を満たす場所は田舎しかありえません。つまり、原子力発電所は危険であるとの認識から、人の住んでいない場所にしか設置できないのです。

安全神話の中身

2005年12月25日、佐賀県では玄海原子力発電所3号機プルサーマル計画について、プルサーマルを推進する立場、反対の立場の双方が一堂に会し、その安全性を議論する県主催の公開討論会が開催されました。この席上、プルサーマルを推進する立場から東大教授大橋弘忠氏の説明が安全神話を見事に語っています。大橋弘忠氏の話す原子力安全神話は、以下の通りです。

事故の時どうなるかは、想定したシナリオに全部依存します。そりゃ全部壊れて全部出てその全部がその一環境に放出されるとなれば、どんな結果でも出せます。それは大隕石が落ちてきたらどうなるかという起きもしない確率についてやっているわけですね。あの一皆さんは、原子炉で事故が起きたら大変だと思っているかもしれませんが、専門家になればなる程核容器が壊れるなどと思えないんですね。どういう現象で、何がどうなったらどうなると、それは反対派の方はわからないでしょうと。水蒸気爆発が起きるわけがないと専門家の皆が言っていますし、僕もそうだと思うんです。

じゃーなんで起きないと言えるんだと、そんな理屈になっちゃうわけです。まあ一安全審査でやっているのは、技術的に考えられる限りですね、ここがこうなって、こうなってここがプルトニウムがこう出てきて、ここで止められてそれでもなおかつ、と言う仮定を設けたうえで、それもそれよりも過大な放射能を放出された前提を置いて計算しているわけです。

ここが一番難しいところですけども、我々はそれはよくわかります。被害範囲を想定するために、こういうことが起きると想定して解析するわけです。ところが、一般の方はどうしてもそういうことがじゃー起きるんだと、また反対派の方がほら見ろそういうことが起きるからそういう想定をするんだと、逆の方向にとられるからおそらく議論が噛み合わないんだと思います。

大橋弘忠氏の話す原子力安全神話を煎じ詰めれば、次のようになります。

核容器が壊れる想定をすれば、大被害になります。しかし、核容器が壊れる確率は起きもしません。それは専門化が保証しているからです。原子力の専門家が、安全審査を行っているから放射性物質を核容器に閉じ込めています。念のため放射性物質の飛散を想定し、被害状況を解析しますが、あくまでも念のためであり、実際に放射性物質が飛散することはありません。

しかし、安全神話は矛盾した論理構成になっています。核容器が壊れる確率が起きないのだから、念のための解析は不要です。現実には原子力発電に伴い放射性物質は、核分裂により日常的に核容器に生成されています。核分裂により日常的に核容器に放射性物質は生成されているのだから、核容器に放射性物質を閉じ込めている限り安全なのです。ゆえに無条件に安全なのではなく、条件付安全が論理から導かれる結論です。

議論が噛み合わない理由

原子力発電は、1966年に原子力発電（株）東海発電所が我が国最初の商業用として営業運転した頃から、放射性物質の大量飛散とトイレなきマンションと揶揄された使用済み核燃料の後始末が問題になっていました。しかし、約半世紀を経た2013年現在でも解決しておりません。それでも、原子力発電推進の政治家、官僚、経済人等の方は、原子力は、エネルギー資源に乏しい我が国にとって、原子力技術で獲得できる事実上の国産エネルギーと位置づけ、エネルギー国防を錦の御旗にして、暗黒面を優先度の低い事柄と判断しているため、一般の方及び反対派の方が問題点を持ち出しても議論が噛み合わないのです。逆に言えば、原子力発電の光明面と暗黒面を同列に扱えば、発電原理からして安全な発明品に議論が進むため、意図的にエネルギー国防を持ち出し議論を封殺しているのでしょう。次に、原子力発電推進の方と反原子力発電推進の方で議論が噛み合わない理由を掘り下げます。

ギリシャでは時間と言うものは、回帰性すなわち循環する天体の運行が示すような回帰性、循環性です。植物は成熟して秋に果実を結ぶと同時に、その力が衰えて、冬になれば枯れて行く。しかしまた春が来て、新しく復活し生殖を繰り返します。こういう回帰、循環がギリシャの時間の考えの基になっています。

ところが、砂漠の遊牧民であるヘブライ民族は、農耕の民であるギリシャの民とは時間の考えが違います。遊牧民はひとところに定着し、そこで四季の循環に応じた農耕が営めません。遊牧民族はいわゆる草を追って次から次へと動いて行き、草があって牧畜ができる間はそこに留まっているが、やがて草がなくなると他の草を追って移動します。だから、農耕を主としたギリシャ民族の時間が循環的であるのに対して、遊牧民族の時間は直線的でどこまでも先へ伸びてゆきます。

産業革命以降は、自然科学の法則を組み合わせた発明品を競争して創作する経済活動が活発になりました。この歴史的状況からヘーゲルの「精神現象学」の中心になる弁証法的思想に至って、時間を循環的即発展的に考えるようになりました。循環的即発展的時間とは、比喩を用いれば螺旋的なのです。螺旋ですからぐるっと廻っているときは循環的ですが、ただ同じところをギ

リシャ的に回帰的に廻っているのではありません。ひと廻りしても同じ場所に戻るのではなく、向上発展した位置に戻るのです。

螺旋的時間を意識する際に、過去に重きをおくものに対して、未来に重きをおく考えができます。過去に重きをおくと、過去の自分自身の連続性を循環的即発展的に考えるのに対して、未来に重きをおくと、自分自身を信じて決断するほかないという冒険を必ず含みます。未来に向かって自分を賭ける循環的即発展的考えです。人生上の重大な決断とか、技術者の発明品に賭ける思いは後者です。

原子力発電推進の方は、過去との連続性を重視するのに対し、反原子力発電の方は子供とか孫の未来に向かって自分を賭ける考えをします。これでは、議論は確かに噛み合いません。哲学的には、相いれない矛盾的な対立があるわけで、交互に自己否定しつつ生かしてゆくという関係が歴史の発展になります。しかし、原子力発電推進の方は国家の圧倒的な力を過信しており、かつ、組織の利害得失に従っているため、矛盾的な対立の中から新しいものの創作を行わず、自己否定せずに常に過去にしがみつ়く態度を取り続けます。それゆえに、反原子力発電の方もしくは原子力発電に中立の方が、新しい発電原理の提案をしても全て否定する横暴が、この度の福島第1原発事故を招きました。原子力発電推進の方が、今の軽水炉原子力発電に固執する限り発電原理の変革は望めません。

第3章 新手の公害

公益と公害

公害には犯人はいるが、悪人はいません。公害は、本来悪しき意図から生じたものではなく、公害発生の基となっているものの本来の意図目標は、公益という人間に役立つことにあります。公害は公益から転じて派生したのであり、公益の主人が転じて犯人になりました。しかし、公害が引き起こされたからと言って、公益がなくなることはありません。ここに公益と公害の関係を簡単に割り切ることができず、公害それ自体が独存することは考えられません。公害それ自体が独存する場合は、武器が使用された時です。

この辺りの道理を、世界的に「ミナマタ」の名で知られ、水銀汚染による水俣病から考えます。1932年からチッソ水俣工場では、世界中で採用されていたアセチレン法アセトアルデヒド工法でアセトアルデヒドの生産を行っていました。1951年にチッソが行った生産方法の一部変更により、無機水銀がメチル水銀に変換され廃液と一緒に海に流しました。この内容は、1967年にチッソ工場の反応器の環境を再現することで実験的に証明されました。これにより、1968年熊本大学水俣病研究班は公式見解として、水俣病の原因がメチル水銀化合物と断定しました。なお現在でも決定的な理論は、まだ構築されていません。このように水俣病は、本来悪しき意図から生じたものではなく、生産量の増大を計画した生産方法の一部変更がきっかけとなり、徐々に環境に知らずして有機水銀を垂れ流していたのです。原因追求及び裁判の過程での、犯人の政府とチッソ及び御用学者の往生際の悪さはつとに有名です。なお、福島第1原発における原子力村の往生際の悪さは、水俣病裁判以上になると思われます。なぜなら、裁判で国が被告席に座る可能性があるからです。

ここで我々は、政府と企業及び御用学者の往生際の悪さを生じさせている原因を掘り下げます。公害は、自然環境の破壊となって現れる以外に、非常に気付きにくい形態で公害が発生しています。自然環境の破壊は、環境汚染となって人目につきやすいですが、社会的公害もしくは精神的公害は、公害たる意識も自覚もないまま深く進行します。たとえば癌のようであり、気付いたときは手遅れになります。

その兆候は、我々がエネルギーを湯水のごとく使用していることです。福島第1原発事故でマスコミの情宣により、家庭及び企業他で節電に努めていますが、過去にエネルギーを湯水のごとく使用していた事実を都合よく忘れていきます。社会的公害もしくは精神的公害が発生する原因は、この辺りにありそうです。

我々は、石炭・石油等無生物資源を浪費し続け、子孫の時代のことなど少しも考えずに、この社会の集団の不平等の利だけを計り、無生物資源がなくなってくれば、その時代の集団が考えるだろうという態度は、りっぱな利己主義といえます。ゆえに、福島第1原発事故に直面するまで、電気エネルギーは湯水のごとく使いたいが、放射性物質は御免こうむるという都合よい考えをします。福島第1原発事故後は、電気エネルギーが不足すると産業がなりたたず、加工貿易立国として立ち行かなくなるとの言説が大手を振っています。集団の不平等の利を計り、明日の日本を考えているのはその通りですが、原子力発電の光明面と暗黒面、広く考えれば我々が信奉

している科学技術の光明面と暗黒面のうち、光明面を強調した考えです。全ての発明品には光明面と暗黒面が一体でつきまとい、原子力発電は光明面と暗黒面が半々の発明品なのです。光明面と暗黒面が一体であるにも係わらず、分離して光明面のみを考える思考は、社会的公害もしくは精神的公害を発症していると言えます。科学技術を始め、法律・社会機構など光明面と暗黒面を一体として捉え、自ら苦悩しなければ循環的即発展的時間による解決はできません。原発事故が発生すれば電気エネルギーが不足するのは当然であり、弁証法的に考えなければ困難を乗り越えられません。

原発公害の特徴とマスコミ報道

先に結論をいえば、原発公害は犯人が電力会社であり、悪人は政治家、キャリア官僚、御用学者、マスコミ等の原子力村の住民です。通常の公害は、本来悪しき意図から生じたものではないということです。しかし、原発は第2章の「安全神話に先立つ立法」の節で述べたごとく、原発の営業運転に先立つ5年前の1961年に原子力損害賠償法を立法、2年前の1964年に原子力委員会が原子力発電所の立地審査指針を決めました。これらの事柄から政府は、放射能事故の恐ろしさを予見していたがゆえの対策と言えます。ゆえに原子力発電所は、はなから危険だったわけであり、敏感に感じ取った未来志向の人たちは反対したのです。原子力発電所は、場所の選定、原子炉の設置など常に国に申請書を提出し認可を得た後に建設するのであり、原発事故は新手の公害ゆえ国害と言えます。

さらに国害には、従来の公害（例：水俣病）にないきわだった特徴があります。一つ目は、徐々に公害が拡散するのでなく急激に公害が拡散します。二つ目は、公害の規模がとてつもなく大きく、地理的には世界中に影響を与え、時間的には未来へ悪影響を与え続けます。三つ目は、公害の原因が放射性物質であるとあらかじめ特定できているのに対策がないことです。ゆえに放射能の影響は、今後何年も続き神のみぞ知ることになります。つまり、政府には暗黒面の放射性物質を消去する術を持ち合わせておりません。その結果、原発事故の過小評価が得意な政府であっても、被害者への賠償金は電力会社では賄えず、国民の懐を充てにする始末です。四つ目は、国害ゆえにマスコミの追及が一般人の刑事事件のように犯人と悪人追求せず、マスコミの過去の責任を霧消にしてお涙頂戴の報道をすることです。

筆者は原発事故が国策による公害であり、従来の公害と異質なことから国害と命名しました。この原発事故に似た話が、大東亜戦争後のマスコミ報道です。大東亜戦争中は、マスコミが大本営発表をそのまま報道していましたが、この度の福島第1原発事故においては、報道の自由があるにも係わらず原子力安全・保安院発表を垂れ流すだけでした。大東亜戦争は、マスコミが政府の尻馬に乗り戦意を煽ったのですが、敗戦後のマスコミは一億総懺悔なる言説を持ち出し、マスコミの責任回避を計りました。翻って、原発推進の後押しをしたマスコミは、原発事故後に解説者ともども核容器のメルトダウンはないと言い続け、国際原子力機関（IAEA）への事故調査報告書提出日が近づくと、敗戦隠しならぬメルトダウン隠しができず、政府発表に追随しました。その後は、一億総懺悔ならぬ一億総節電を巧妙に報道し、メルトダウン無しの報道責任を回避しようと目論んでいます。マスコミは、一億総節電の押し売り報道をすることでマスコミの責任

回避を計るばかりか、逆に国民の思考を停止状態に追い込んでいます。

マスコミの大東亜戦争中及び大東亜戦争後の報道とこの度の福島第1原発事故の報道が、同じ垂れ流し増幅思考であることに驚きを禁じえず、マスコミ組織が垂れ流し思考を代々引き継いでいるとも思います。ゆえに、マスコミは常に提灯持ちを繰り返し、事が明白になれば後出しジャンケンの報道をします。

原発の安全を哲学する

原発事故が発生して、2年3ヶ月を経過したが一向に収束の兆しは見えません。原発再開に向け政治家、キャリア官僚、知事、マスコミ、大企業のトップ等から安全対策をきちっとすれば、原発再開が可能なことを宣伝していますが、本当かどうか哲学的に考察します。

マスコミから情宣されている安全な原子力発電所が可能というものは、現実の原子力発電所から何かマイナスしたものがあって、現実の原子力発電所は発電原理に矛盾を含まないが、しかし安全な原子力発電所になるには何かはまだ足りないと言っています。だから安全な原子力発電所になるには、何か加わることにより安全になると考えています。そのため、安全基準を見直し対策を強化し不足分を補えば安全になると考えています。従って安全な原子力発電所を考えるには、現在の軽水炉原発に何か新しい原理をもってくる必要はなく、安全は軽水炉原発の方に存在していると考えています。安全な原子力発電所は、いつも現実の原理の上に考えられています。

原子力発電所は、電気事業者が原発建設に際し国に原子炉設置許可申請書を提出し、原子力委員会と原子力安全委員会が原子炉設置を許可します。福島第1原発事故で、循環ポンプを建物の中に入れるとか、非常用ディーゼル発電機を水没しないように高台に移設しておけばよかった言われています。仮に、筆者が東京電力の原子力発電所の担当とします。原発の仕事に従事しているので、原発の安全性を高めるため、非常用発電機を水没しないように高台に移設する稟議書を書いたとします。このとき、上司から国から安全だとお墨付きをもらっているのに、何故に時間とお金をかけて工事をするのだと問われれば、答えに窮します。つまり、一度安全審査に合格すれば、その時点の安全審査基準に漏れた事象で原発事故が発生する可能性があるのです。人間である限り完璧な安全審査基準は、作れません。

次に、安全審査合格を絶対とする形式論議の極め付けを、2006年12月22日付で衆議院議員の吉井英勝氏が提出した、『巨大地震の発生に伴う安全機能の喪失など原発の危険から国民を守ること』に対する2006年当時の安倍晋三総理の答弁書で例示します。

① 何らかの事故で原発の冷却系の外部電源が切断された場合でも、非常時の電源に切り替わる

から何も問題ない。

② 地震や津波に関しては、申請ごとに経済産業省（原子力安全保安院）が審査してそれを原子力

安全委員会が確認しているので何も問題ない。

③ 地震や津波で原子炉が停止したあとに電源が切断されるというような事態は、絶対おこらないよに

万全を期しているの、起こった場合のことなど考えていない。

筆者は、現状の原子力発電所というのは、発電と同時に放射性物質を生成しており本質的に安全と矛盾しており、現在の軽水炉原発の発電原理を否定したところに安全な発電所が成り立つと考えます。原発事故が発生すれば電気エネルギーが不足するのは当然であり、弁証法的に考えると軽水炉原発の発電原理を否定した、新しい発電原理の発電所を建設し電気エネルギーを供給すべきです。つまり、発電時に放射性物質を生成しない新しい発電原理に則った、発電所でないと安全は担保できません。原発再開に向け政治家、キャリア官僚、知事、マスコミ、大企業のトップ等からの安全対策発言は、軽水炉原発が発電と同時に放射性物質を生成している致命的欠陥を、言葉で覆い隠すまやかし以外なにもものでもないと言断できます。

このような勝手な安全に至るのも、発明品の光明面と暗黒面を一体化して捉えるのではなく、発電という光明面のみを勝手に切り離し、現世集団の不平等の利を計る人間至上主義の上に利己的主義の思考が根底にあるためです。

安全神話のその後

安全神話を語っていた東京大学の大橋弘忠氏の見解が、福島第1原発事故の後の週刊現在2011年6月11月号に掲載されていました。週刊現在編集部は、大橋教授に対し、「プルトニウム飲め」と言われたら飲むことができるか、また今でも「原発は安全」と言い切れるか直接取材を試みたが、大学に話すなど言われているとの事で応じてもらえなかった。ただし、今回の事故についてはメールで返答があり、概要は以下の通りです。

(1) 今回の事故の原因は津波だけであり、地震動はほとんど関係しない。10mを大きく超える津波は、

専門家も予想しなかった。津波が電源系をほとんど全滅させることや海水冷却系の機器を流出

させることも想定されていなかった。

(2) 事故については、東電はよく対応してきた。後は、大きな放射性放出はないと思う。

(3) まじめに技術的な解説をする人を御用学者のように決めつける風潮があるのは残念。つつこみどころ満載の内容ですがそれはさておき、第2章の安全神話と読み比べてください。筆者は安全神話を語っているのが地球人とすれば、安全神話のその後を語っているのは同一人物ではなく異星人だと思いました。大橋教授は科学者ですから安全神話と安全神話のその後の普遍内容を語って欲しかったです。

原発事故を苦悩する

我々が哲学と呼んでいる学問は、ギリシャに発生し、科学を包含していました。その科学がいかに重要な働きをしていることは、今日の文明を機械文明と称していることから明らかです。しかし、我々は科学技術が生み出す発明品の便益に幻惑されています。マスコミが科学を取り上げる仕方は、単に物珍しい発見発明を情緒的に紹介し、ただ知識の羅列、新知識の注入をします。発明品は、科学技術を活用し製作者の意向を実現する行為から発芽したのであり、人間の実践的な精神の働きにあります。マスコミから出来上がった知識をいかに注入されても、それは無いよりましで、いくらか効果はありますが、主体的に考えておらず学んでいます。主体的に考えるとは、福島第1原発ののっぴきならぬ状況に苦悩して疑問を呈することです。たとえば、地震前には福島第1原発の原子炉格納容器を収容している地下室に地下水が侵入していないのに、地震後は毎日400トンの地下水が何故に侵入するのとか、放射性物質が核容器から飛散すれば大事故になることは予見されていたのに、何故に放射性物質の消滅法を研究してこなかったと言うことです。前者は、地震により原子炉格納容器を収容している地下室のコンクリートに亀裂が入り、地下水が侵入していると思われ、安全審査基準の不完全性を証明しています。後者の恐ろしい放射性物質を消滅できないなら、放射性物質を生成しない発電原理の発電所に変えなければなりません。テレビ、新聞等のマスコミからの一方的情報注入は、実践的な精神の働きを弱め自ら苦悩しません。自ら原発事故を苦悩しない限り、発明品の光明面と暗黒面を一体として捉えるこ

とができず、すぐれた対案が評価ができず現状に埋没してしまいます。苦悩するには、楽観主義の上の利己主義に加え経済至上主義から脱却しなければなりません。

苦悩しない代表者が先ほどの原子力発電推進の学者である大橋弘忠氏です。なにしろ原子力発電所は絶対安全の現状肯定ですから、安全審査基準に全幅の信頼を置くことができないとか、放射性物質の消滅法の研究なんて思いもしないと思われます。単なる反対ではなく苦悩の末の弁証的反対は、考えが深いのです。苦悩するとは、原発の光明面と暗黒面を同列に論じ解きほぐすことです。

人間至上主義

1632年のデカルトの「方法序説」に始まる近代哲学は、紆余曲折を経て進展しますが、西欧社会の集大成は1776年のアメリカの独立宣言、1789年のフランス革命のスローガンに見出すことができます。その働きは、中世の封建社会の縦の秩序をきれいに清算し、人権に進展を促し、教会の権威から解放された実践的精神活動の科学技術の発展に現れています。また、教会のくびきから開放された人間は、科学や技術の発展を支柱にした理性による普遍性の人間像・社会観の樹立と経済活動に邁進しました。その人間像・社会観として高唱したものは、誰も知る「人は生まれながらに自由であり、平等である」という人間観であり、その社会観は自由平等の人間が結合した社会、別けても封建的な身分上の差別を許さぬ市民社会の観念です。今日では、西欧的な特徴を帯びたこの自由と平等の人間観・社会観は、人類普遍の近代原理であるかのように考えられています。

上記の理念で出発した近代社会ですが、自由と平等は両立せず徐々に理念から逸脱しました。これが歴史と言うものですが、別けても教会の権威から解放された人間は、ひとりひとりが神と対峙することになり、ひとりひとりの覚悟と責任が自由平等と引き換えに与えられたのです。

西洋哲学は「汝自信を知れ」の自覚の喚起や、「無知の知」の深刻な自覚に始まり、仏教はまた「凡夫」の自覚に立脚して永遠の真知に肉迫しました。ところが、人間心理上のくだらぬ独善や自負とは全く質を異にする、いわゆる形而上学的独善の近代哲学の上に自由と平等の人間観・社会観が出来上がりました。近代の社会観は「市民社会」という言葉が示すように、その基本的性格は都市的であり、逆にいえば農村社会はそれ自身が前近代的なものとされ、この考えは都市の人口が極端に増加したことで証明されています。このような近代的な社会観、それと呼応する近代的な人間観は、資本主義でも共産主義でもいささかも変わりません。

科学技術による大量生産は、経済活動に最適な人口が多い国、人口が多い都市を好みます。ひとつの商品はいずれ供給と需要が均衡しますが、企業は科学技術を利用し次々と商品を発明するため、そのつど新しい市場が開拓されました。いまでは、商品開発時から地球規模の市場を想定しています。そのため、人間の自然環境への関与は、はなはだ大きくなり公害が発生するに至りました。

科学技術が生み出した多くの商品に幻惑されたのか、我々は自然から原材料を再生することなく地下資源を掘り出し、微視的物理学により人造物を作り続けています。この考えも近代哲学が承認した経験的・実験的推論を基礎とする認識論にあります。この認識論は資本主義でも共産

主義でも共通です。中世までのアリストテレスの生物をモデルにした合目的性自然の代わり、近代哲学は機械的因果律を根本原理にする自然感を生み出しました。我々は、この自然を発明品の原材料としか見ないため、ここに自然征服の機械文明が成立し、そして環境汚染が広がったのです。自然環境の汚染や自然征服・自然改造の愚を改めることは、人間至上・人間中心の無謀な近代哲学を捨てるか修正する他にないことが、福島第1原発事故により直面し始めたのです。自らの考えが変わらない限り、行動は変わりません。

自然の秘密を知れば知るほど、この自然の秘めた力を利用する。これが技術というものです。人間の技術は、人間の目的に動かされます。この目的は人間の欲望に動かされます。原子力発電所は、不幸にして軍事利用が先行した原子爆弾の核技術を、1953年アイゼンハワー米大統領が国連にて原子力の平和利用演説という欲望に動かされた結果始まりました。

原子力村の特権的思考

人間の思惟はものを固定して、同一性的に考えるのが本性ですから、自己矛盾的に動的に発展するような現実そのものを写し、思惟に写しとるというのは本来不可能です。そういう現実十全的にあてはまるようになろうと思うならば、思考自身が自己否定をしなければなりません。思考自身が行き詰って、自己を放棄することによってのみ新しい思考が生まれてきます。

しかるに、原子力委員会が5年ごとに開催して議決している原子力大綱は、常にウランープルトニウムサイクルに固執しています。まさしく原子力委員会は、ウランープルトニウムサイクルに固定して、同一的に考えています。むろん安全神話と矛盾する立法化を、原子力発電所の営業運転前に議決していることは、承知しています。原発の発電原理に伴う暗黒面が約半世紀を経ても解決できないことから、思考自身が行き詰っているのは明らかであり、原子力委員会の政策を放棄する中から新しい政策が生み出せるのにも係わらず、逆に原発は絶対安全と言い切るところに、特権的思考を見ることができます。個人の思惟と異なり、集団組織では自己を放棄することは至難の業のようです。それと言うのも、エネルギー国防を原発推進の矛と盾にしているため、何をしても許されるという特権的思考をします。特権的思考の見本が、原子力村のやらせメールです。

福島第1原発の重大事故が勃発していたにも係わらず、2011年6月に経済産業省が開いた玄海原発2、3号機の運転再開を巡る佐賀県民向け説明会で、九州電力が関連会社の社員らに運転再開を支援する文言の電子メールを投稿するよう指示して世論偽装工作をしました。さらに、5日前の2011年6月21日、九電幹部が佐賀県知事公舎で古川康知事と会談した際、知事が「再開容認の立場からも意見を出してほしい」と発言したことがやらせメール発端だと九電第三者委は認定しました。その後、北電も2008年10月3日付社内メールで「プルサーマル計画に関する公開シンポジウムへの参加協力について」を送り、世論偽装工作をしたことが発覚しました。四国電力、中部電力もなんと原子力安全・保安院の要請で世論偽装工作をやっていたことが判明、やらせは電力会社の”お家芸”となりました。しかし、特権的思考の持ち主たる原子力村の住民は、エネルギー国防に対する行為の理由から何も処罰がありません。

原発の大規模障害の可能性を信ぜぬ原子力村の人は、かえってこの故に原発事故の発生を防ぐ

ことさえできなくなります。実際、福島第1原発の大規模障害後のおそまつな対応を見るにつけ、何も対応を考えていなかったことが露呈しました。原発の大規模障害を覚悟している人は、かえって事故を防ぐことができますし、事故後の対応もあらかじめ考え付きます。同様に、飛行機の墜落の可能性を信ぜぬ人はおりません。飛行機の墜落を覚悟しているがゆえに、未然に事故を防ぐ工夫ができるのです。特権的思考者は、原発の絶対安全を武器に国民との信頼の絆を断ち切り、原発事故が生じても無責任な態度を取り続けています。特権的思考者は、わざと複雑な組織関係になるように原子力村を構築し、その複雑な組織関係をかくれみのに責任追求をかわし無責任に逃げ込みます。その結果、根本解決ができなくなり、悪影響が放射性物質のごとく後々まで続くのです。

現在の機械文明において、上記の理が文明全体を覆っていないかと言えないでしょうか。現在の機械文明に安住している我々は、この文明の故に滅びる覚悟をもつとき、そしてこのときのみ、我々は機械文明の自滅を避ける途を工夫し得るに至ると思います。

第5章 止まらない経済競争

経済至上主義

機械文明の黎明期は、哲学が社会を思想面から変革していきましたが、産業革命以降は現世利益が得られる経済活動が、社会全体を覆いつくしました。1868年の明治維新の前から大東亜戦争までは、その経済活動が西欧の植民地競争であり、1989年のベルリンの壁崩壊以降は、グローバルな市場競争へと経済競争が熾烈になりました。その結果、現世利益に直結する事柄は後先を考えますが、現世利益以外の物事の後先を考えない思考をします。この思考の結果が、この度の福島第1原発事故につながりました。電気エネルギーは現世利益であり、豊富な電気エネルギーは産業の要であり将来を考えると原子力発電を肯定しました。しかし、放射性物質の飛散は少数の方ではありますが予見されており、今となっては責任のない子孫に取り返しのつかない悪影響を未来永劫与え続けます。

要は特権的思考の人は、現世利益優先であり、利己的であり、苦悩しない人なのです。なぜなら、原子力発電を推進した政治家を選挙行動で選んだのは有権者であり、有権者が原子力発電所の手形の裏書をしたわけであり、有権者が最終責任をとると考えるからです。そういう意味から言えば、特権的思考の人ほどではないですが、原発推進の政治家に投票した有権者に責任の一端があります。

現世利益を信奉する思考は、特に大東亜戦争後の高度経済成長から急速に広まりました。平川克美著「移行期的混乱」によれば、1956年から1973年までが経済成長率平均9.1%の高度経済成長期、1974年から1990年までが経済成長率平均3.8%の相対安定期、1991年から2008年までが経済成長率平均1.1%の停滞期です。その間の1968年に国内総生産は世界第2位になり2010年に中国に抜かれ第3位になりました。高度経済成長の初期から相対安定期までの戦後の半世紀は、下層中流の人々が一生懸命働いていれば、それなりの財産ができるまでの幸せな時期でした。しかし、何が原因と一概に言えませんが、人口減少に伴う経済環境では経済成長神話は、終焉したと考えるしかありません。証拠は挙げにくいですが、今は政治的、経済的、あるいは産業の思考枠が、大きく転換してゆく過渡期に差し掛かっており、一生懸命働いても以前の人のようなそれなりの財産が持てる人の割合は、大幅に減少すると思われる。

経済成長しない社会の過渡期が、一生懸命働いてもそれなりの財産ができない経済競争にどんな意味があるかを考えさせてくれます。原子力発電所の安全神話の崩壊と共に、経済成長神話も崩壊した捉えるべきでしょう。安全なエネルギーで経済活動すべきであり、無限の経済成長の夢をいまだ見ているのは、浮世離れした特権的思考の人たちのようです。むろん、安全なエネルギーが生み出されても今の政治的、経済的、あるいは産業の思考枠は、大きく変革されると思われます。

原子論による経済競争の説明

原発事業もグローバルな競争にさらされています。フランス、韓国などは、原発を輸出してい

ます。福島第1原発事故前は、国内で原発の新設があったので原発メーカーと関連会社は、国内市場で生きて行けました。しかし、原発事故により原発メーカーと関連会社は、新規の原発が受注できなくなり、既存の原発の保守しか仕事がありません。これでは、原発に従事している社員を養えないため、原発を輸出して仕事を獲得しようとしています。要は、原子力村の住民を養うために原発輸出を推進しているのであり、企業が倒産しない限り経済競争から離脱できない致命的欠陥の現れです。

経済競争は、世界中で行われています。この経済競争を、ギリシャのエピキュロスの原子論を用いて考えます。エピキュロスの原子論は、原子があらゆる方向へ直線的に機械的に動くという考え方を否定し、それぞれの原子がみな同じ方向へ向かって平行に動く考えです。同じ方向へ向かって一様に動くというのではみな平行ゆえ、ぶつかることなく、集散離合はありえないことになります。それで、原子はそれに固有の方向に向かって運動はするが、一方からいえばその本質的な場所へ向かって動く必然性を持っていると同時に、他方原子はいつでも自己のうちに、自己の固有の道から逸脱してそれるという可能性をもっている考えをします。この結果、原子には必然と偶然が備わり相互の衝突も起こり、複雑多

様な現象も説明できます。我々は、普通に必然と偶然とは矛盾しているものだと考え、そのいずれか一方だけを肯定して他を否定します。なぜなら、我々の思考は矛盾のない同一性を求めるため、どうしても必然の考えのみで論理を組み立て、偶然を駆逐してしまうからです。歴史の現実には、必然と偶然とが微妙に絡み合っただけで歴史の局面が展開して行きます。

米国オバマ大統領は2009年10月23日、マサチューセッツ工科大学で講演を行った際、「日本やドイツ、中国からインドに至るまで、世界中のあらゆる国が新たなエネルギー資源や利用方法を開発すべく競争している。この競争に勝った国が、グローバル経済を率いることになる」と述べ、米国の再生可能エネルギー分野での先行を示唆しています。丁度経済競争の方向へ世界中の人・集団が、平行に動いている状況を想像してください。通常は必然の力が勝って経済成長の方向へ世界中の人・集団が、平行に動いています。この状態において、福島第1原発事故のような偶然が作動しますと、経済競争からそれるかもしれないのです。また、第2章の「噛み合わない理由」で現在の歴史時間は、循環的即発展的に捉えることを申しました。世界中の人・集団が必然的に経済競争していますが、偶然が加わることで循環的即発展的となります。短期間的には循環的でしょうが、力強い偶然あるいは弱い偶然が多く集まることで社会全体が、発展の方向へ進んで行きます。

現在は、日本中の家庭や企業が節電に励んでいます。企業は当然経済競争を念頭においてのことと思われ。単に、経済競争を弁証法的に否定の否定をすることで新しいものは主張できますが、経済競争に至った、つまり機械文明を生み出した思想が弁証法の対象になります。つまり、近代哲学が今日の経済至上主義を結果的に招来したわけですから、哲学が弁証法的に思索の方向を模索するのは当然と考えます。

経済競争が自然を工業製品の材料化

機械文明の黎明期の哲学者フランシス・ベーコンが、新機関で述べた「自然を支配するため

には、自然に従わなくてはならない」の言葉は、今日の市場原理主義に到達しました。確かに、ベーコンの哲学はスコラ哲学に対する自然の認識の新たな哲学です。キリスト教にアリストテレスの哲学を取り入れたスコラ哲学は、自然を美しい、秩序整然たる観想で捉えるため、自然を材料にして工作する発想はベーコンからです。ゆえに、「自然を支配するためには、自然に従わなくてはならない」と思索したのでしょう。ゆえに、近代の哲学観と科学観から導かれる考えは、石炭・石油等無生物資源を浪費し続け、子孫の時代のことなど少しも考えずに、世界中が経済競争に明け暮れ、無生物資源がなくなってくれば、その時代の集団が考えるだろうとします。ちなみに、原子力発電所から出る核廃棄物は、自然に従わず何十万年もの厳重な管理を必要とするわけで、まさしく子孫の時代のことには考えていません。機械文明全盛の現在、自然環境との折り合いを考えず、無生物資源の枯渇を常に心配しています。それでも現在の哲学観と科学観は、人間が自然を支配するのを是とし、無生物資源の搾取にとどまらず、多国籍企業は遺伝子組み換え作物や生物多様性支配の特許戦略に邁進しています。後者の多国籍企業は、有望な植物や動物を発見するために、自然の豊かな貧しい国々へ科学者を送り出します。科学者が持ち帰った動植物の有用性がひとたび確立されれば、それらに依存する製法、場合によっては生物そのものが多国籍企業の特許になります。まさに、多国籍企業が自然を工業製品の材料としか見ない行動をしており、こんな世界をフランシス・ベーコンは思い描いたとは思えません。月並みですが、これからは「自然と共生するためには、自然に従わなくてはならない」のではないのでしょうか。

ちなみに、以下の生物多様性を示す記述については、本川達雄著の「生物学的文明論」を参考にしました。現在、地球には未知のものを含めると3000万種もの生物がおり、知られている種数は180万種、それが毎日、約100種ずつ絶滅しています。こんなことは長い生命の歴史の中で、なかったことです。多国籍企業が、有望な植物や動物を血眼になり探すのも、現在使われている医薬品のうち4割が生物由来であり、新しい薬はまだまだ多様な生物の中に隠れていると考えているからです。それ故に、多国籍企業が有望な植物や動物を独占しようとしています。まさに、多国籍企業は現在の錬金術師なのです。錬金術に支障があると考えている米国は、生物多様性条約を批准していません。

フランスの海洋探検家のクストー氏が1995年9月の国連大学で、生物多様性の意義を講演されました。その時に、生物界の多様性があるために生き物は生き続けているのであって、この種類をだんだんに消していくことにより、生き物の生きるという可能性を小さくしている話をされています。それなのに、毎日、約100種ずつ生き物を絶滅させています。

人類を脅かす問題

従来の科学技法は、自然科学の法則の発見、発明品の創造に威力を発揮してきました。しかし、原子力発電所から出る核廃棄物、グローバルな気候変動、環境ホルモン汚染、植動物の種の絶滅等といった人類を脅かす問題は、科学技術が引き起こした問題ではあるが、ベーコンとガリレオが考案しデカルトが哲学保証した科学技法で解決できるのかと仰うこと仰うです。過去の公害は、確かにベーコンとガリオが考案しデカルトが哲学保証した科学技法で解決してきてきましたが、代わりにより大きな公害を生み出レしました。ひとつひとつの公害は解決できたが、代わりにより地球規模の公害を生み出してしまったのです。機械文明の暗黒面が、原子力発電所から出る核廃棄物、グローバルな気候変動、環境ホルモン汚染、植動物の種の絶滅等です。これらの問題は、機械文明が作り上げた世界の矛盾を、象徴的に現しています。

しかし、原子力発電所から出る廃棄物の処理以前に、大量に飛散した推定105京ベクレル以上の放射性物質の影響が忍び寄っています。1986年4月にチェルノブイリ原子力発電所4号機で国際評価尺度レベル7の事故が発生しました。その時、大量の放射性物質が飛散しました。その放射線影響は、反原発推進の方を中心に我々に伝わって来ています。そして、この度の、福島第1原子力発電所の1号機から4号機で国際評価尺度レベル7の事故が発生し、同じく大量の放射性物質が陸海空に飛散しました。低線量の被曝は、人体に悪影響を及ぼさないとの言説があります。筆者は、人体実験中との認識であり予断は許されません。そのような中、2013年4月3日、東洋経済オンラインで『福島原発周辺で「動植物異常」相次ぐ』の記事を探しました。以下の文章は、筆者が簡略化のため変更しています。

3月30日に東京大学内で開催された「原発災害と生物・人・地域社会（主催：飯館村放射能エコロジー研究会）」で、福島市や全村民が避難を余儀なくされている福島県飯館村など、福島第1原子力発電所からの放射性物質で汚染された地域で、動物や植物に異常が多くみられることが研究者による調査で明らかになった。

東大や琉球大学など4人もの研究者が、稲の遺伝子異常、蝶の被曝の検証、ウグイスの異常、ニホンザルの白血球減少の異常性を報告した。

稲の遺伝子異常は、筑波大学大学院生命環境科学研究科のランディープ・ラクワール教授が報告した。ラクワール教授は、つくば市内の研究所で育てた稲の苗を、福島第1原発から40キロメートルに位置する飯館村内の試験場に持ち込んだうえで、放射線の外部被曝にさらされる屋外に置いた。そして生長が進んでいる標本から3番目の葉をサンプルとして採取し、ドライアイスを用いて冷凍保存したうえで、つくばに持ち帰った。持ち帰った稲の特定の遺伝子の働きを観察したところ、低線量のガンマ線被曝がさまざまな遺伝子の発現に影響していることがわかった。今後、種子の段階から影響を見ていくとともに、人間にも共通するメカニズムがあるかどうか見極めるとのこと。

蝶の被曝の検証は、琉球大学理学部の大瀧丈二准教授が報告した。大瀧准教授らの調査は、日

本国内にごく普通に見られる小型のチョウであるヤマトシジミを福島第1原発の周辺地域を含む東日本各地および放射能の影響がほとんどない沖縄県で採集し、外部被爆や内部被爆の実験を通じて生存率や形態異常の有無を調べたものだ。その結果、福島県内のヤマトシジミでは、羽のサイズが小さい個体が明らかに多いことがわかった。更に、沖縄のエサを食べた個体と福島県内の個体は、死に方でも明らかに異常が多くみられ、さなぎの殻から抜け切れずに死んだり、成虫になっても羽が伸びきれない事例を写真で紹介した。これだけの実験では、遺伝性（異常がDNA損傷に基づくもの）であると断言するには、十分な証拠とは言えないとのこと。

ウグイスの異常は、東京大学大学院農学生命科学研究科の石田健准教授が報告した。石田准教授らは、福島県阿武隈高地の中でも特に放射線量が高く、現在、「帰還困難区域」に指定されている浪江町赤字宇木地区（福島第1原発から25キロメートル）で2011年8月に野鳥のウグイス4羽を捕獲したところ、「うち1羽から今までに私自身、ウグイスでは見たこともないおできが見つかった」。捕獲したウグイスの羽毛を持ち帰って放射線量を測定したところ、セシウム134と137合わせて、最高約53万ベクレル／キログラム汚染が判明した。

ニホンザルの白血球減少の異常性は、日本獣医生命科学大学教授の羽山伸一教授が報告した。2011年4月から2013年2月にかけて福島市内で捕獲された396頭のサルと、青森県で2012年に捕獲された29頭を比較。土壌中のセシウム量と筋肉中のセシウム濃度の関係を検証した。その結果、「土壌汚染レベルが高いところほど、体内セシウム蓄積レベルも高い傾向があることがわかった」。なお、青森県のサルからはセシウムは検出されなかった。次に、注目すべきは、血液中の白血球の数だ。避難指示区域にならなかった福島市内のサルにもかかわらず、ニホンザルの正常範囲より白血球数、赤血球数ともに減少しており、白血球は大幅に減少していた。特に気になったのが2011年3月の原発事故以降生まれた子どものサル（0～1歳）。汚染レベルと相関するように白血球の数が減っている。本日の講演内容がにわかには人間の健康への研究に役立つかはわからない。ただし、現在の福島市内のサルの被爆状況は、チェルノブイリの子どもたちとほぼ同じ水準。チェルノブイリの子どもたちに見られる現象が、ニホンザルにも起こったことが明らかにできれば考えている。

以上から放射線が動植物に及ぼす影響は、年々深刻化すると思われます。加えて、被災者を含めた多くの人に推定105京ベクレル以上の放射性物質の影響が動植物に遅れて発現し、末代まで影響が及ぶのではないかと危惧します。

我々はニュートンが、りんごの木からりんごが落ちるのを見て万有引力の法則がひらめいた逸話をよく聞きます。そして、科学技法により宇宙の果てまで適用できる万有引力の法則に至りました。ところが、そのような科学技法は、どうやら原子力発電所から出る核廃棄物、グローバルな気候変動、環境ホルモン汚染、植動物の種の絶滅等といった人類を脅かす問題解決に適していないのではないかと思います。逆に言えば、これらの人類を脅かす問題に対する従来の科学技法には適用限界があるのです。さらに、止まらない経済競争の集団組織が、金儲けでうごめくためにより解決を難しくしています。その結果、あくなき経済競争を是とする市場原理主義が資

本主義の中から誕生し、人間の欲望を一段と肥大化させ、大切な自然環境をマネーに変える悪の規範を信奉しました。筆者は、大胆にも近代哲学と近代科学の思考枠から脱却しないと、人類を脅かす問題は解決できないと考えます。

近代哲学の変革

まず近代哲学ですが、デカルトが近代的思考の大きな枠組みを理性にしました。以降西欧の哲学は、理性主義が貫いているわけです。近代的人間は自己の理性の力を確信し、その理性的能力によって自己のあり方を定めたり、自然に技術的に働きかけたり、また社会を合理的に改造していく自信を得たのです。この思考の流れには、理性に対する信頼があり、同時に人間行為に対する自信があるようです。同時に、教会からのしほりを断ち切って、内面から神と向き合いましたが次第に世俗化していきました。世俗化した象徴が、資本主義の総本山である米国です。新大陸に移住した多民族が、伝統のしほりが無い国家を建設したのですから、世俗的行為はプラグマティズムになりました。プラグマティズムとは、実用主義、道具主義、実際主義、行為主義と訳される考え方です。この思想は機械文明と相性がよく、雄大な国家に成長しました。逆に、近代哲学の底流に潜んでいる暗黙の考えが端的に現れました。その考えは、現世集団の不平等の利を計る人間至上主義あるいは人間中心主義であります。公害の深因が、現世集団の不平等の利を計る人間至上主義あるいは人間中心主義に存するのであり、人間至上主義あるいは人間中心主義の哲学に自省が加わらなければ、公害の性根を断つことはできません。

科学技法の変革

人類を脅かす問題は、全て自然との係わりで生じています。核廃棄物は自然のサイクルで消滅できず、グローバルな気候変動は人類が使うエネルギーの廃熱が地球に備わっている宇宙空間へ放出する廃熱能力を超過し、環境ホルモン汚染は自然のサイクルで消滅できず、植動物の種の絶滅は人間の自然の生態系破壊によります。科学技術の技法は、デカルトから始まる近代哲学の主観と客観の二元論を基礎に、自然を研究対象として切り出します。切り出した自然を客観と言うわけですが、考えやすくするため要素に分解し、主観側が自然を抽象化した要素の法則に置き換えます。これが俗にいう要素還元主義であり、要素還元主義では客観側を機械論的因果律に再編してしまいます。しかし、自然は多くの植動物が互いに関係を持ち合って、複雑にからみあい環境問題が生じない非機械論的因果律のシステムを構築しています。

なぜなら、自然は機械論的因果律の世界とは対極の、命がいきづく多様生物の世界です。多様生物の世界は、親から子、子から孫へと命をつなぐのが努めです。そのため、多くの植動物が互いに関係を持ち合って、複雑にからみあって、秩序整然たる体系を維持しています。要素還元主義の自然は、生の自然ではなく抽象化した自然であり、抽象化した自然に発明品の影響が加わるのです。だから人類を脅かす問題は、全て自然との係わりで生じるわけで、科学技術の最も不得意な領域です。たとえば、ミミズは腐敗物を食べて植物が吸収しやすい栄養素に変える後始末をしていますが、ミミズの法則なんて聞いたことがありません。ミミズも自然の中で存在価値があります。筆者は、科学技法の中心に生物をモデルに据え、関係性因果律で科学技法を再編する必

要がありそうと考えています。

低エネルギーの生活様式へ

大変大それた結論を申し上げましたが、皆さんはどのようにお考えですか。明日の糧を心配しなければならない、あるいは今期の会社の業績目標を達成しなければならない等の事情ゆえ、論外だと言われる方がほとんどだと思います。しかし、経済成長が持続している場合の公害と、経済成長が右肩下がりの場合の国害では、判断の背景が違います。仮に、続いて若狭湾で福島第1原発と同じ規模の原発事故が発生すれば、関西地方は大災害に見舞われ日本民族の海外移住を決断しなければならないかもしれないのですから。

人間は、順風満風のとき変化を求めませんが、環境が激変すれば従来と同じ考えで行動すれば、「座して死を待つ」の例えになりますから、本能的にあれこれ考え始めます。筆者は弁証法的にあれこれ考えると、機械文明の否定の否定なる思惟になります。弁証法は、矛盾律を犯してはならない論理の否定の否定と異なり、循環的即発展的になります。筆者には当然新たな文明を構想する能力はありませんが、勝手な夢を以下に述べます。

電力不足のおり、国中が節電一色です。いずれ原子力発電に代わるエネルギーを生み出すと思われませんが、再びエネルギーを湯水のごとく使う生活様式を目指すのかと云うことです。少し考えれば分かることですが、従来の経済競争思考で貿易を活発化させば、人・物・金をより大量に移動させることになり、地球規模でエネルギーをますます使用するばかりです。産業革命は動力が人間または水車、馬や牛などの生の力そのままから、人工的発動力（蒸気、電気、爆発ガス等）になったことで実現しました。それだけ人工発動力の素が文明の成立に大きく関わっています。従来の人工的発動力ではなく、かといって従来から言われている自然からの直接的エネルギー（太陽光、風、地熱等）ではなく、自然秩序から貰い受けるエネルギーとでもいうべき人工的発動力を想像します。つまり、現在考えられている自然エネルギーも大仕掛けな獲得です。たとえば、家庭で発電可能な太陽光発電も、パネル製作が機械文明の極致ともいうべき大仕掛けな工場で製造されます。我々の主食は、秋に収穫した米を食べますが内一部を種として残し、毎年農作により命をつなぎました。エネルギーも農業のように、自然秩序から貰い受けるようにすべきです。そして低エネルギーの生活様式に切り替えるべきです。

日々の生活が忙しいため、世界が少しずつ変化していることに気が付きません。しかし、小さな変化が積み重なるとある時期に大きく変化をしていることに気が付きます。その結果、経済競争で四苦八苦している中から人類を脅かす核廃棄物、グローバルな気候変動、環境ホルモン汚染、植動物の種の絶滅等といった致命的問題が眼前に現れました。にも係わらず、あいもかわらず市場原理主義に基づく経済競争をグローバル化させ、人類を脅かす問題を一層解決困難にしています。

西欧中世においては、大きな問題で先駆的に苦悩していたのが、本書で取り上げたフランシス・ベーコン、ガリレオ・ガリレイ、ルネ・デカルトです。ベーコンはキリスト教神学者・哲学者・法律家であり、ガリレオは哲学者・物理学者・天文学者であり、デカルトは哲学者・数学者です。いずれも哲学と哲学以外の学問をきわめた学者です。哲学はもともと全体を思惟する学問ですから、新しい文明原理を模索したのではないのでしょうか。しかし、その機械文明は完全に行き詰まりを見せています。近代哲学が結果的に今日の経済至上主義を招来したわけですから、哲学思考で解決を模索すべきです。

我々は、機械文明に代わる新たな文明原理を考えねばなりません。それには、どうしても全体を俯瞰しなければなりません。科学を単に科学として、技術を単に技術として、経済を単に経済として、政治形式を単に政治形式として・・・それぞれ孤立した事象を統合して考えなければなりません。現在は、分業化と専門家が生産工程や業種に限らず、学問・芸術・スポーツなどの様々な分野にまで及んでいます。その分業化と専門家の立場を離れ事象を統合化した中から新しい文明原理を模索すべきです。西欧中世の末期に哲学者であり確たる専門家から新しい文明の原理が生み出されました。ゆえに、哲学的に思惟することは非常に大切です。

機械文明黎明期の人間は、個人としては死ぬが人類は栄えていくだろうということを、信仰に近いほど確信していました。しかし、現在ではそのような楽観主義にはなれません。ことによったら、あと150年ぐらいで・・・と個人の死を予感するようなかたちで、文明の滅亡が予感されるのです。つまり、福島第1原発事故から導かれるのは、近代的生き方をしているのは早晩どうにもならなくなると言うことです。当然、筆者には新しい文明の原理を提案する能力はありません。ただ言える事は、あらゆる方向での試みと、試行錯誤を経て、はじめて生まれるのであって、結果的に一個人の着想とか一個人の提案がきっかけになると思われまます。

2013年5月28日

参考文献

第1章 現在文明の成立ち

- ・ 高山 岩男 著 文明の哲学 東海大学出版

第2章 安全に対する両者の相違

- ・ 東京電力HP
- ・ 田邊 元 著 哲学入門 筑摩書房

第3章 新手の公害

- ・ 水俣病—W i k i p e d i a

第4章 機械文明の哲学的考察

- ・ 高山 岩男 著 文明の哲学 東海大学出版
- ・ 田邊 元 著 哲学入門 筑摩書房

第5章 止まらない経済競争

- ・ 平川 克美 著 移行期的混乱 筑摩書房
- ・ 田邊 元 著 哲学入門 筑摩書房
- ・ 本川 達雄 著 生物学的文明論 新潮社
- ・ 中村桂子 鶴見和子 著 四十億の私の『生命』 藤原書房

第6章 近代の思考枠の変革

- ・ 福島原発周辺で「動植物異常」相次ぐ 東洋経済オンライン

福島原発事故を哲学する

<http://p.booklog.jp/book/71887>

著者 :小森 三郎

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/s-komou/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/71887>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/71887>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ